越境する歴史叙述——方法論をめぐる一断片

佐藤　貴史

歴史叙述は今日いかなる方法でなされるのか。とくに神学や宗教学、そして哲学などの人間精神に深く関わる《思想の歴史》は、どのように叙述されることを望んでいるのか。この研究ノートでは、ミュンヘン大学のフリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ（Friedrich Wilhelm Graf）の仕事を参照しながら、従来の歴史叙述の境界線／枠組みを越境し、ときには侵犯するような宗教史、そして思想史の方法論について考えてみたい。

1. 神学／社会の歴史

グラーフを中心にして *Zeitschrift für Neuere Theologiegeschichte/Journal for the History of Modern Theology* という雑誌が編集されているが、その第一号の巻頭言においてTheologiegeschichteという概念／方法論が紹介されている。この概念をどのように訳すべきかは難しいところだが、「神学のはっきりとした歴史学的自己理解と神学的反省の歴史性」（“Editional,” 1）に立脚したTheologiegeschichteは、Dogmengeschichte や Kirchengeschichte とは一線を画しながら、キリスト教神学と（政治や経済を含めた）社会の関係を扱おうとする歴史叙述の概念である。このような歴史学的な知に基づいたTheologiegeschichteはドイツにおいて18世紀以降にはじまるものであり、時代が19世紀へと移行する中で「神学という学問の歴史」（Ibid., 3）は多くの神学者や歴史学者によって著され、同時にそれは「すぐれて現在的な連関」（Ibid.）によって規定されていた。すなわち「神学の歴史（Theologiegeschichte）を媒介としながら、初期の神学史家たちは啓蒙主義の過程の中にある学問理解の急速かつ劇的な変化を考察していた」（Ibid.）のである。彼らは、まさに18世紀の神学における変動を「神学革命」や「思惟革命」として解釈していた（Ibid.）。

19世紀になるとすでに、Theologiegeschichteという概念はドイツのプロテスタント神学者たちによって「近代神学の歴史」（Ibid., 4）へと限定された。彼らは「キリスト教の歴史の時代区分」（Ibid., 5）を行うが、そこでは同時に「古プロテスタンティズム」と「新プロテスタンティズム」という区別もなされた。加えて彼らは、Theologiegeschichteを「近代という地平における神学の多元化の歴史」（Ibid.）、すなわち「近代的かつ市民的解放と超教派的で理性的な理想像」（Ibid.）から強い影響を受けた「新プロテスタンティズム」の歴史として構想したのであった。

啓蒙主義、ロマン主義、そしてドイツ観念論による神学的思惟の変化、近代の宗教批判、そしてそれに伴う社会の変動を視野におさめたTheologiegeschichteは、こうしてさらに文化史／文化学的な意味においても理解されていくことになる。*Zeitschrift für Neuere Theologiegeschichte* もまた「神学の伝統、理念、そして概念が『近代精神』の歴史の中にもっていた特別な重要性を明確にすることに寄与する」（Ibid., 8）ものである、と巻頭言には書かれている。

さて、このような視点はグラーフの研究においてプロテスタントに限定されない仕方で、さらに拡大していくことになる。近現代の歴史叙述、とりわけ宗教や哲学をめぐる歴史叙述の射程はプロテスタントのみならず、カトリックやユダヤ教にまで及ばなければならない。

2. 共有された歴史／絡まりあった歴史

グラーフは、その著作 *Die Wiederkehr der Götter. Religion in der modernen Kultur* の第一章に「近現代宗教を解釈すること」というタイトルをつけている。そこで彼は宗教解釈および宗教史の方法論を、「宗教経済学」「共有された歴史」「宗教的な場」という三つに分類して論じている。ここでは二番目の「共有された歴史」について言及してみたい。

「信条の比較における宗教的多元主義」（*Die*

Wiederkehr der Götter, 30）という視点から、グラーフはヨーロッパ宗教史を書き直そうとする。彼によれば、「宗教解釈の諸文化はさまざまなものが入り混じった境界線をもち、それ自体で純粋に存在するものではなく、……他の宗教的意味体系との永続的交流のなかで展開される」（“Einleitung: Religion und Gesellschaft im Europa des 20. Jahrhunderts,”25）。それゆえ、「ユダヤ教やキリスト教の生活世界の内部にある構造的類似や並行的発展」（*Die Wiederkehr der Götter*, 38）をみようとしない近現代のヨーロッパ宗教史は、多くの問題を孕むことになる。グラーフにとって「近現代の宗教史は共有された歴史という視点においてのみ適切に叙述される」（Ibid.）。こうして近現代のヨーロッパ宗教史の叙述にとって重要なことは、「教派的本質主義」（Ibid., 43）を回避すること、すなわち「教派を超越する視点であって、この視点においては理念の移転と意味の闘争、浸透と防御の逆説的同時性が可視的となる」（Ibid., 42）。

このような方法論は近現代のユダヤ教とキリスト教の宗教史を描くとき、大きな意味をもつことになる。彼は二つの例をあげている。

第一の舞台は18世紀、啓蒙主義の時代である。グラーフは問う。もし啓蒙主義が「脱教派主義化という解放的なパトス」（Ibid., 43）の中で展開されていたとすれば、「教派的本質主義」から叙述されたヨーロッパ啓蒙主義の歴史は、少なくともヨーロッパ宗教史の一部としては適切に理解されないだろう。「プロテスタント、カトリック、そしてユダヤ教の啓蒙主義は、あらゆる宗教的生活世界における啓蒙主義者の密なコミュニケーションのネットワーク化とならんで、宗教文化的な変革プロセスがもっている個人を超越した構造を捉えるような言説の歴史としてのみ適切に理解されうる」（Ibid., 43-44）。すなわち、いわゆる「ユダヤ的啓蒙主義」と呼ばれるハスカラは、「ユダヤ教特有の具体化における普遍的な啓蒙主義」（この点についてはDavid Sorkinの研究を参照されたい）と考えることができるのである（Ibid., 44）。

第二の舞台は、19世紀後半および20世紀初頭におけるリベラルな宗教文化とその反抗者たちの時代、ニーチェ的言語が宗教的言説に浸透し、新しい神秘主義に魅了されたマルティン・ブーバーがリベラルなプロテスタンティズムのネオ神秘主義に関する議論（Neomystik-Debatten）に後続していた時代である。ブーバーやゲルショム・ショーレムが「ユダヤ・ルネサンス」について主張すれば、プロテスタントの大学神学のなかでは「ルター・ルネサンス」が語られた。また「シュテファン・ゲオルゲのカトリック化した、断固たる比喩的言語は、教派的生活世界を横断する仕方で、若年の、表現主義的な激情にかられた神学的反歴史主義者たちの神学的省察世界を規定した」（Ibid., 49）。神の言葉を聴くために啓示を神学の中心においたのは、ひとりプロテスタントのカール・バルトだけではなかった。カトリックにおいてはヘルマン・ヘーフェレが、そしてユダヤ教においてはフランツ・ローゼンツヴァイクが敬虔な真剣さでもって神の言葉に耳を傾けていた。そして「歴史的相対主義を克服するために」、ショーレム、パウル・ティリッヒ、ルドルフ・ブルトマン、ならびにエマニュエル・ヒルシュが「歴史を絶対者の自発的侵入に開かれた出会いの空間として構想した」（Ibid., 50）。そのさい、もっとも重要な概念だったのが、ゲオルゲとフリードリヒ・グンドルフによって新たに広められた「カイロス」という概念である。

グラーフはこのような1920年代初頭から頭角をあらわしはじめ、彼らの父親世代に反抗した若き知識人たちを「神のフロント世代」（“Annihilatio historiae? Theologische Geschichtsdiskurse in der Weimarer Republik,”54）と呼ぶ。とくに興味深いのは上記で言及したように、「神のフロント世代」がそれぞれの仕方で「時間経験」や「歴史理解」に関して問題意識を《共有》していたことである。例えば、彼らは「消滅」（*annihilatio*）（Ibid., 66）という概念は終末論的に再解釈しな

がら、多種多様な語彙――「原歴史」、「啓示の歴史」、「神の歴史」、「神の言葉の歴史」、「神の王国の歴史」――を駆使して、「現在を質的に新たに把握」（Ibid., 66-67）しようとし、「伝統的な終末論的時間の意味論のラディカルかつ新しい解釈」（“Einleitung: Religion und Gesellschaft im Europa des 20. Jahrhunderts,” 27）を行った。こうして彼はこれまで述べた二つの例に基づきながら、次のように宣言するのであった。「共有された歴史によって、近現代の多くの宗教史は実験的に一度まったく別様な仕方で物語られるべきである」（*Die Wiederkehr der Götter*, 50）。

さて、「共有された歴史」とは区別されたもう一つの概念「絡まりあった歴史」についても簡単に言及しておこう。グラーフによれば、共有された歴史という視点が近現代ヨーロッパにおける宗教共同体あるいは教派間のさまざまな相互交換的なプロセスに焦点を合わせるならば、絡まりあった歴史という視点は「《宗教的な場》と《非宗教的な環境》とのあいだにあり、共有された歴史に劣らず多様で複雑な移転関係」（“Einleitung: Religion und Gesellschaft im Europa des 20. Jahrhunderts,” 33）に着目する。宗教的なものと政治的なものとの関係について考えてみよう。彼はいう。「……政治的なもののきわめて高度な政治的柔軟性はヨーロッパのカトリシズムのうちにはっきりと見て取れる」（Ibid., 35）。啓蒙主義、フランス革命、そして近代市民社会の成立と産業化の下でカトリック教会は、大部分は反近代主義的な方向に流れ、保守的な政治勢力と密接な関係をもったのであった。

またこのような領域横断的な視点から、国民という「集合的アイデンティティ」や共通の「文化的記憶」「記憶の連鎖」がいかにして形成され、どのような仕方で「真の自己」――場合によっては、真の国民？――が探求されるかといった問題も論じることができよう。なぜなら、そこでは「宗教的言語」や「伝承された神話的物語」といったものが《絡まりあいながら》重要な役割を果たしているといえるからである（Ibid., 39）。

3. コンステラチオンはどこで起こるのか？

事実上、多元主義化してしまった近代世界の中で、キリスト教神学の歴史は従来の教会史や教義史の枠組みを乗り越え、そして近現代ヨーロッパ宗教史の歴史は諸教派と個別の宗教の境界線を侵犯していく。さらには宗教的なものと政治的なものという各々自立した領域もまた、相互に絡まりあいながら叙述されていかざるをえない。このような方法論や視点は歴史叙述という問題においては非常に興味深いが、その一方でどんどん叙述の領域が拡散していくにつれて、「テクストそのものをどう読むか」という議論が蔑ろにされてしまう怖れはないだろうか。ある歴史を叙述するという行為は、何らかのテクストを読み込むという行為と必然的に結びついている。歴史を叙述することは、あるテクストが成立したコンテクストを再構成する作業だともいえよう。もっといえば、諸個人、諸教派、諸宗教、諸領域を従来とは異なる仕方で配置していく行為、すなわち新たなコンステラチオンの実践が新たな歴史叙述を生み出すのである。その意味では、コンステラチオンはテクストの外で起きているといえるかもしれない。

しかし、同時に思想史の研究者はテクストのコンテクストをテクストの中にみていくという、ある意味、当たり前の方法を手放すわけにはいかないのではないか。ある歴史を――もしかしたら、それは「物語」と呼ばれるかもしれない――叙述するために、従来の枠組みを越境する仕方でコンステラチオンを行うこととは別に、あくまでテクストの中にある諸観念の意味連関に（のみ？）注目しながら読む方法、すなわちテクストの中でコンステラチオンを引き起こすような読み方は、いかにして可能なのであろうか。過去の思想の歴史を再構築し、そしてテクストを読むための方法を模索するという、今日においてはあまりに地味で、おそらく反時代的な振る舞いは、同時に新しい意味を創出するというもっとも冒険的な行為と

結びついているのである。

参考文献

Friedrich Wilhelm Graf, “Was heißt: «Religion modernisieren»?” in *Jüdische Geschichtsschreibung heute*, Michael Brenner und David. N. Myers (Hg.), München: Verlag C. H. Beck, 2002.

———. “Annihilatio historiae? Theologische Geschichtsdiskurse in der Weimarer Republik,” *Jahrbuch des Historischen Kollegs* 2004.

———. *Die Wiederkehr der Götter. Religion in der modernen Kultur*, München: Verlag C. H. Beck, 2004, 2. durchgesehene Auflage 2004, 3. durchgesehene Auflage 2004, 1. Auflage in der Beck’schen Reihe, 2007.（序言と第 1 章のみ邦訳あり。安酸敏眞訳『神々の再来――近現代文化における宗教』（抄訳）、北海学園大学人文論集、第 34 号、2006 年 7 月）。

Richard Crouter/Friedrich Wilhelm Graf/Günter Meckenstock, “Editional,” *Zeitschrift für Neuere Theologiegeschichte/Journal for the History of Modern Theology* 1 (1994).

Friedrich Wilhelm Graf/Klaus Große Kracht “Einleitung: Religion und Gesellschaft im Europa des 20. Jahrhunderts” in *Religion und Gesellschaft. Europa im 20. Jahrhundert*, Friedrich Wilhelm Graf/Klaus Große Kracht (Hg.), Köln: Böhlau Verlag, 2007.

（さとう・たかし　聖学院大学総合研究所特任研究員）